

金正
七年

最近朝鮮男情要覽

大正七年 最近朝鮮事情要覽

第一章 沿革

第一節 併合顛末

東洋永遠の平和を維持し日韓兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしむる目的を以て明治三十七年二月在京城の帝國代表者は韓國政府と重要な協商を遂げ同月二十三日兩國代表者に於て左記議定書の調印を了せり本議定書は即ち日韓兩國の關係を一新し其の後に於ける兩國關係推移の端を啓きたるものなり

一 韓國政府が帝國政府ヲ確信シ施政ノ改善ニ關シテ其ノ忠告ヲ容ルルコト

二 韓國皇室ノ安全康寧ノ保證

三 韓國ノ獨立及領土保全ノ保證

四 第三國ノ侵害若ハ内亂ニ依リ韓國皇室ノ安寧或ハ領土ノ保全ニ危險アル場合ニ帝國政府ハ臨機ノ措置ヲ取り韓國政府ハ之ニ對シテ十分ノ便益ヲ與フルコト竝帝國政府ハ軍事上必要ノ地點ヲ收用シ得ルコト

五 兩國政府ハ相互ノ承認ヲ經スシテ本協約ノ趣意ニ違返スヘキ協約ヲ第三國トノ間ニ訂立スルヲ得サルコト

六 帝國代表者ト韓國外部大臣トノ間ニ未悉ノ細條ヲ臨機協定スルコト

尋て八月二十二日に至り日韓兩國政府代表者は京城に於て更に一の協商を遂げ財政外交兩顧問の傭聘竝韓國政府と諸外國との條約締結其の他外國人に對する特權讓與若は契約等の處理に關しては豫め帝國政府と協議すへきことを協定し兩國の關係を一層明確ならしめたり蓋し前記二月の議定書に依り兩國の關係大に進捗したりと雖韓國に於ける施政改善の實を擧げむと欲するは決して容易の業にあらずのみならず外交に關する同議定書の趣意を實行するに當りては一般に互り猶詳細なる取極を要するものありたるに因るなり

翌三十八年九月日露兩國間に締結せられたるポーツマス條約に於て露國政府は帝國が韓國に於て政治上軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有することを承認し帝國が韓國に於て必要と認むる指導保護及監理の措置を執るに方り之を阻害し又は之に干渉せざるべきを約したり是より前き同年八月十二日調印せられたる日英同盟約款も亦日本國は韓國に於て政治上軍事上及經濟上の卓絶なる利益を有するを以て大不列顛國は日本國が該利益を擁護増進せむが爲に正當且必要と認むる指導監理及保護の措置を韓國に於て執るの權利を承認すと規定し即ち一方に於ては日英同盟約款の支持他方に於ては日露講和條約の承認に依り日韓兩國の關係は日露戰爭終結と前後して一大進捗を來たし韓國に對する帝國の地位益鞏固且明確を加ふるに至れり帝國政府は此の新關係に基き韓國に對する保護指導を完ふし益兩國を結合する利益共通の主義を鞏固ならしめむことを欲し此の目的を以て同年十一月十七日所謂日韓新協約を締結せり本協約の成立するや韓國保護政治の基礎愈確立するに至れり茲に於て同年十二月二十日勅令第二百六十七號を以て統監府及理事廳官制を發布し同時に在韓國の帝國公使館及領事館を撤廢し侯爵伊藤博文統監に任せられ翌三十九年二月一日各其の事務を開始せり統

監府既に設置せられ韓國の外交は擧げて帝國政府の監理に歸し施政の改善漸く其の歩を進むるを得たりと雖一朝にして積年の宿弊を一洗し保護の實績を擧げむとするは固より容易の業に非す加之維新更始の際に當り上下の人心動もすれば其の歸嚮する所を誤り種種の妨碍頻發せり偶明治四十年夏に至り海牙密使事件の起るや統監は日韓兩國の關係を一層密邇せしむるの必要を認め同年七月二十四日更に韓國政府の代表者との協約を訂立せり即ち左の如し

- 一 韓國政府ハ施政改善ニ關シ統監ノ指導ヲ受クルコト
- 二 法令制定及重要ナル行政上ノ處分ニ付豫メ統監ノ承認ヲ受クヘキコト
- 三 司法事務ト普通行政事務トノ區別ヲ爲スコト
- 四 高等官吏ノ任免ニ統監ノ同意ヲ要スルコト
- 五 統監ノ推薦ニ依リ日本人ヲ韓國政府ニ任用スルコト
- 六 統監ノ同意ナクシテ外國人ヲ傭聘セサルコト
- 七 財政顧問ノ傭聘ヲ廢止スルコト

斯の如く韓國に對する我が保護權行使の範圍を擴張し一轉内地人官吏をして從來間接指導の地位に在りしを直接施政の衝に當らしめ政務機關全般に互る官制改革を斷行し宮中府中を燦然區別し司法制度の獨立を企圖し中央地方各般行政の刷新に努めたりしも當時韓國財政の狀態は司法制度を整備するの財力を有せざるのみならず法典の整備と司法官の養成とは一朝にして之を行ひ得へきに非ざるを以て明治四十二年七月韓國の司法及監獄事務を舉げて我が政府に委託せしむるの件を協定し同年十一月より之を實施し同時に韓國に於ける此等の機關を廢止し統監府司法廳、裁判所及監獄を設置し以て韓國に在留する帝國臣民及韓國臣民の生命財産を均等に保護するの基礎を確立するに至れり

斯の如くにして帝國政府は韓國政府の委託に依り施政の改善を試み著著其の實績を舉げむとせしも猶未だ遽に民衆の福利を増進し公共の安寧を保持し秩序を恢復するに足らず暴徒草賊は處處に出沒し良民其の堵に安せず又不逞の徒は民衆を煽動使嗾し官吏に對し暴行を加へ職務の執行を阻礙する等人心の動搖甚たしく遂に明治四十二年十月二十六日哈爾濱に於て前伊藤統監を暗殺するに至れり

尋て同年十二月二十二日首相李完用の兇害を見るありて國內の形勢日に不穩にして到底韓國を併合するにあらざれば完全に統治の目的を達し有終の美果を收むること能はざるの狀勢瞭然たるものあり茲に於てか併合の議漸く動きしも未だ遂行の機運に至らざりしか會明治四十三年五月三十日統監子爵曾彌荒助病を以て職を辭するや陸軍大臣子爵寺内正毅統監に兼任せられ茲の歲六月二十四日帝國は韓國の警察事務を繼承し統監府警察官署官制を公布し同年七月一日之を實施するに至れり尋て同年七月二十三日寺内統監の朝鮮に赴任するや當時の狀勢併合の一日も忽諸に付すへからざるものあるを察知し韓國政府の當局者と折衝し兩國將來永遠の福利を増進せむか爲韓國皇帝自ら進みて統治權を我が天皇陛下に讓渡するの時宜に適切なることを提議せしに兩國政府の意見一致したるを以て八月二十二日寺内統監は韓國總理大臣李完用と左記日韓併合條約を締結調印せり

日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ハ兩國間ノ特殊ニシテ親密ナル關係ヲ願ヒ相互ノ幸福ヲ増進シ東洋ノ平和ヲ永久ニ確保セムコトヲ欲シ此ノ目的ヲ達セムカ爲ニハ韓國ヲ日本帝國ニ併合スルニ如カサルコトヲ確信シ茲ニ兩國間ニ併合條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲日本國皇帝陛下ハ統監子

爵寺内正毅ヲ韓國皇帝陛下ハ内閣總理大臣李完用ヲ各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ右全權委員ハ會同協議ノ上左ノ諸條ヲ協定セリ

第一條 韓國皇帝陛下ハ韓國全部ニ關スル一切ノ統治權ヲ完全且永久ニ日本國皇帝陛下ニ讓與ス
第二條 日本國皇帝陛下ハ前條ニ掲ケタル讓與ヲ受諾シ且全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトヲ承諾ス

第三條 日本國皇帝陛下ハ韓國皇帝陛下太皇帝陛下皇太子殿下其ノ后妃及後裔ヲシテ各其ノ地位ニ應シ相當ナル尊稱、威嚴及名譽ヲ享有セシメ且之ヲ保持スルニ十分ナル歳費ヲ供給スヘキコトヲ約ス

第四條 日本國皇帝陛下ハ前條以外ノ韓國皇族及其ノ後裔ニ對シ各相當ノ名譽及待遇ヲ享有セシメ且之ヲ維持スルニ必要ナル資金ヲ供與スルコトヲ約ス

第五條 日本國皇帝陛下ハ勲功アル韓人ニシテ特ニ表彰ヲ爲スヲ適當ナリト認メタル者ニ對シ榮爵ヲ授ケ且恩金ヲ與フヘシ

第六條 日本國政府ハ前記併合ノ結果トシテ全然韓國ノ施設ヲ擔任シ同地ニ施行スル法規ヲ遵守スル韓人ノ身體及財産ニ對シ十分ナル保護ヲ與ヘ且其ノ福利ノ増進ヲ圖ルヘシ

第七條 日本國政府ハ誠意忠實ニ新制度ヲ尊重スル韓人ニシテ相當ノ資格アル者ヲ事情ノ許ス限リ韓國ニ於ケル帝國官吏ニ登用スヘシ

第八條 本條約ハ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ裁可ヲ經タルモノニシテ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

右證據トシテ兩全權委員ハ本條約ニ記名調印スルモノナリ

明治四十三年八月二十二日

統 監 子爵 寺 內 正 毅 印

隆熙四年八月二十二日

內閣總理大臣 李 完 用 印

之と同時に帝國政府は韓國と條約を有し又は韓國に於て最惠國待遇を享けつつある獨逸、亞米利加

合衆國、奧地利、洪牙利、白耳義、支那、丁抹、佛蘭西、大不列顛、伊太利、露西亞の各國政府に對シ左の宣言を爲したり

明治三十八年日韓協約成リテヨリ茲ニ四年有餘其ノ間日韓兩國政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ從事シタリト雖同國現在ノ統治制度ハ尙未タ十分ニ公共ノ安寧秩序ヲ保持スルニ足ラス衆民疑懼ノ念ヲ懷キ適歸スル所ヲ知ラサルノ狀アリ韓國ノ靜謐ヲ維持シ韓民福利ヲ增進シ併セテ韓國ニ於ケル外國人ノ安寧ヲ計ルカ爲ニハ此ノ際現制度ニ對シ根本的ノ改善ヲ加フルノ必要アルコト瞭然タルニ至レリ日韓兩國政府ハ前記ノ必要ニ應シテ現在ノ事態ヲ改良シ且將來ノ安固ニ對シテ完全ナル保障ヲ與フルノ急務ナルヲ認メ日本國皇帝陛下及韓國皇帝陛下ノ承認ヲ經兩國全權委員ヲシテ一ノ條約ヲ締結セシメ全然韓國ヲ日本帝國ニ併合スルコトト爲セリ

該條約ハ八月二十九日ヲ以テ之ヲ公布シ同日ヨリ直ニ之ヲ施行スヘク日本帝國政府ハ同條約ノ結果朝鮮ニ關スル統治ノ全部ヲ擔當スルコトトナレルヲ以テ茲ニ左ノ方針ニ依リ外國人及外國貿易ニ關スル事項ヲ處理スヘキコトヲ表明ス

一 韓國ト列國トノ條約ハ當然無效ニ歸シ日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘシ

朝鮮ニ在留スル諸外國人ハ日本法權ノ下ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有シ且其ノ適法ナル既得權ノ保護ヲ受ク

日本帝國政府ハ併合條約施行ノ際現ニ朝鮮ニ於ケル外國領事裁判所ニ繫屬スル事件ハ最終ノ決定ニ至ル迄其ノ裁判ヲ續行セシムセヨトヲ承諾スヘシ

二 日本帝國政府ハ從來ノ條約ニ關係ナク今後十年間朝鮮ヨリ外國ニ輸出シ又ハ外國ヨリ朝鮮ニ輸入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル外國船舶ニ對シ現在ト同率ノ輸出入税及噸税ヲ課スヘシ

朝鮮ヨリ日本ニ移出シ又ハ日本ヨリ朝鮮ニ移入スル貨物及朝鮮開港ニ入ル日本船舶モ亦今後十年間前項ノ貨物及船舶ニ對スルト同率ノ課税ヲ受クルモノトス

三 日本帝國政府ハ今後十年間日本國トノ條約國ノ船舶ニ對シ朝鮮開港間及朝鮮開港ト日本開港間ノ沿岸貿易ニ從事スルヲ許スヘシ

四 從來ノ開港場ハ馬山浦ヲ除クノ外舊ニ依リ之ヲ開港トナシ更ニ新義州ヲモ開港トシ内外船舶ノ出入及之ニ依ル貨物ノ輸出入ヲ許スヘシ

又亞爾然丁、伯刺西爾、智利、格倫比亞、西班牙、希臘、墨西哥、諾威、和蘭、祕露、葡萄牙、暹羅、瑞典、瑞西の各國政府に對し左の宣言を爲したり

明治四十三年八月二十二日日本國ト韓國トノ間ニ締結セラレタル條約ニ依り韓國ハ日本國ニ併合セラレ本日ヨリ日本帝國ノ一部ヲ成スコトナレリ爾今日本國ト列國トノ現行條約ハ其ノ適用シ得ル限朝鮮ニ適用セラルヘク該現行條約ヲ有スル列國ノ臣民又ハ人民ハ朝鮮ニ於テ事情ノ許ス限日本内地ニ於ケルト同一ノ權利及特典ヲ享有スヘシ

日韓併合條約の成立するや同月二十九日左記詔書の煥發と共に前記條約を公布せり

朕東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝國ノ安全ヲ將來ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓國力禍亂ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓國政府ト協定セシメ韓國ヲ保護ノ下ニ置キ以テ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確定セムコトヲ期セリ

爾來時ヲ經ルコト四年有餘其ノ間朕ノ政府ハ銳意韓國施政ノ改善ニ努メ其ノ成績亦見ルヘキモノアリト雖韓國ノ現制ハ尙未タ治安ノ保持ヲ完スルニ足ラス疑懼ノ念毎ニ國內ニ充溢シ民其ノ堵ニ安セス公共ノ安寧ヲ維持シ民衆ノ福利ヲ增進セムカ爲ニハ革新ヲ現制ニ加フルノ避ク可ラサルコト瞭タルニ至レリ

朕ハ韓國皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓國ヲ舉テ日本帝國ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ應スルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓國ヲ帝國ニ併合スルコトトナセリ

韓國皇帝陛下及其ノ皇室各員ハ併合ノ後ト雖相當ノ優遇ヲ受ケヘク民衆ハ直接朕カ綏撫ノ下ニ立チテ其ノ康福ヲ增進スヘク產業及貿易ハ治平ノ下ニ顯著ナル發達ヲ見ルニ至ルヘシ而シテ東洋ノ平和ハ之ニ依リテ愈其ノ基礎ヲ鞏固ニスヘキハ朕ノ信シテ疑ハサル所ナリ

朕ハ特ニ朝鮮總督ヲ置き之ヲシテ朕ノ命ヲ承ケテ陸海軍ヲ統率シ諸般ノ政務ヲ總轄セシム百官有司克ク朕ノ意ヲ體シテ事ニ從ヒ施設ノ緩急其ノ宜キヲ得以テ衆庶ヲシテ永ク治平ノ慶ニ賴ラシムルコトヲ期セヨ

同日舊韓國皇帝は舊韓國臣民に對し左の勅諭を發せられたり

朕否德ニシテ艱大ナル業ヲ承ケ臨御以後今日ニ至ル迄維新ノ政令ニ關シ亟圖シ備試シ用力未タ嘗テ至ラスンハアラスト雖由來積弱痼ヲ爲シ疲弊極處ニ至ル時日間ニ挽回ノ施措望ナシ晝夜憂慮普後ノ策茫然タリ此ニ任シ支離益甚シケレハ自ラ終局拾收シ得サルニ底ラン寧ロ大任ヲ人ニ託シ完全ナル方法ト革新ナル功效ヲ奏セシムルニ如カス故ニ朕於是瞿然内ニ省ミ廓然自ラ斷シ茲ニ韓國ノ統治權ヲ從前ヨリ親信依仰シタル隣國大日本皇帝陛下ニ讓與シ外東洋ノ平和ヲ鞏固ニシ内八域ノ民生ヲ保全セントス惟フニ爾大小臣民國勢ト時宜トヲ深察シ煩擾スルコト勿ク各各其ノ業ニ安シ日本帝國ノ文明新政ニ服從シ幸福ヲ共受セヨ朕ノ今日ノ此ノ舉ヤ爾有衆ヲ忘ルルニ非ス唯爾有衆ヲ救活セントスルノ至意ニ出ツ爾臣民等ハ朕ノ此ノ意ヲ克ク體セヨ

と以て兩國素志の相融和せるを見るべく何等の騷擾を見ることなくして併合の事成り面積一萬四千百二十三方里の領土は新に附加せられ韓國を改めて朝鮮と稱し朝鮮總督を置き天皇に直隸し委任の範圍内に於て陸海軍を統率し諸般の政務を統轄せしめらる茲に於て寺内統監は朝鮮總督に任せらる

るに同時に各地理事官に訓令を發して經營指導宜しきを得、施政の効果を擧ぐるに遺漏なからしめんことを期せり其の訓令に曰く

本日公布ノ併合條約ニ依リ韓國ハ帝國ニ併合セラレ自今朝鮮ト改稱シテ帝國領土ノ一部トナリ域内ノ人民ハ悉ク帝國ノ治下ニ立チ政令是ヨリ一途ニ出テ皆皇化ノ惠澤ニ浴スヘシ然レトモ朝鮮現時ノ狀態ハ未タ全ク帝國內地ト同シカラサルモノアリ故ニ帝國法令ニシテ直ニ朝鮮ニ適用セラルルモノノ外併合ノ結果朝鮮ニ於テ效力ヲ失フヘキ帝國法令及韓國法令ハ爾後總督ノ命令トシテ其ノ效力ヲ存續シ將來時勢ノ進運ニ從ヒ漸チ逐テ改修ヲ加フヘシ居留民國ハ元來外國ニ住居スル帝國臣民ノ設立スル團體ニシテ朝鮮カ帝國ノ版圖ニ歸シタル以上ハ自然地方行政機關ニ編入セラルヘキモノナリト雖今俄ニ之ヲ廢止スルニ便ナラサル事情アルニ依リ暫ク其ノ存在ヲ認メ將來之ニ代ルヘキ地方制度ノ完成ヲ待テ其ノ整理ヲ爲サシムヘシ又韓國及外國間ノ諸條約ハ消滅ニ歸シ帝國及外國間ノ諸條約ハ事情ノ許ス限り朝鮮ニ適用セラレ該條約國ノ臣民及人民ハ帝國內地ニ於ケルト同様ノ權利及特典ヲ享有スルト共ニ總テ帝國ノ法權ニ服從スルコトトナリ隨テ朝鮮ニ在留ス

ル外國人ニ係ル訴訟事件ハ之ヲ帝國裁判所ニ於テ管轄スルコト恰モ他ノ一般人民ニ關スル場合ト同一ナルヘシ關稅ニ至テハ之ト稍其ノ事情ヲ異ニシ今直ニ帝國ノ關稅法又ハ協定稅率ヲ適用スルトキハ啻ニ外國貿易ニ劇變ヲ與フルノミナラス內國ノ經濟關係ニ對シ重大ナル影響ヲ及スヘキカ故ニ帝國政府ハ當分ノ內總テ從來ノ慣例ヲ繼續スルコトニ決シ條約上ノ規定ニ拘ラス朝鮮ノ輸出入貨物ニ對シテハ從來ト同率ノ關稅ヲ課シ又帝國內地ト朝鮮トノ間ニ出入スル貨物ニ付テモ從來ト同率ノ移出入稅ヲ課スルコトト爲セリ

元來併合ノ趣旨タルヤ兩國相合シテ一體ト爲リ彼我ノ差別ヲ撤去シ相互全般ノ安寧幸福ヲ増進セムトスルニ外ナラス然ルニ之ヲ以テ強弱兩國ノ成敗ト爲シ驕慢自ラ持シ輕浮ノ言行ニ出ツルカ如キコトアラム是レ實ニ其ノ本旨ヲ沒却スルモノト謂フヘシ從來本邦ノ居留民ハ多クハ異郷ニ僑居スルノ想ヲ爲シ動モスレハ自ラ高ウシテ他ヲ蔑視スルノ弊アリ若今日ノ改革ニ際シ一層倨傲ノ心ヲ增長シ新附ノ人民ニ凌辱ヲ加フルカ如キコトアラハ却テ彼等ノ惡感隔意ヲ招キ事毎ニ杆格ヲ生シ將來永ク相融和スル機ナクシテ遂ニ不測ノ禍ヲ釀スニ至ルヘシ今幸ニ此ノ更始一新ノ時ニ會ス

宜シク其舊想前態ヲ一變シ新附ノ領民ハ卽我カ同胞タルコトヲ念ヒ之ニ接スルニ同情ヲ以テシ之ヲ待ツニ友誼ヲ以テシ相提携シテ處世ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ隆昌ニ貢獻スルコトニ努ムルヲ要ス貴官ハ以上ノ趣旨ニ基キテ管下一般ノ居住民ヲ指導シ將來施政ノ效果ヲ舉クルニ於テ遺漏ナキコトヲ期セラルヘシ

明治四十三年八月二十九日

統監 子爵 寺内正毅

又總督は朝鮮上下の民衆に諭告し施政の綱領を示して曰く

觀聖文武 天皇陛下ノ大命ヲ奉シ本官今ヤ朝鮮統轄ノ任ニ膺ルニ際シ茲ニ施政ノ綱領ヲ示シテ朝鮮上下ノ民衆ニ諭告ス

夫レ疆域相接シ休戚相倚リ民情亦昆弟ノ誼アルモノ相合シテ一體ヲ成スハ自然ノ理必至ノ勢ナリ是ヲ以テ大日本國 天皇陛下ハ朝鮮ノ安寧ヲ確實ニ保障シ東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持スルノ緊切ナルヲ念ヒ前韓國元首ノ希望ニ應シ其ノ統治權ノ讓與ヲ受諾シ給ヒタリ自今前韓國ノ皇帝陛下ハ昌德宮李王殿下ト稱セラレ皇太子ハ王世子トナリテ後嗣長ヘニ相繼承シ萬世無窮タルヘク太皇帝陛下